

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.11)

「危難は、恐れないとたちまちやってくる」

・・・新型インフルエンザの蔓延に思う・・・

現在世界はSF小説などの中で、単なるパニック話として看過してきた事柄が、看過できない現実的な出来事として起きてくるものである。新型インフルエンザ、パンデミック(世界的大流行)、フェーズ5など、おどろおどろした言葉が、連日賑わしている。

地球上には150カ国を優に超える国々があるのに、何故滞在先のメキシコから、現今のインフルエンザ騒ぎが始まったの？という驚きが素直な感情として湧き上がる。自然界の神様はとんだ気まぐれを引き起こしてくれたものだ。

当初一番罹患数が多いとされたメキシコ市では、学校の休校処置、博物館や遺跡の閉鎖、レストランでの自主休業や、客席での食事を禁止して持ち帰りだけの処置、職場の業務縮小、停止などの経済活動制限処置がとられ、配属先の職場でも連日マスクが配られ、着用やうがい、手洗いの励行などが義務付けられた。

メキシコ流の挨拶である抱擁や頬へのキス、握手をする人も少なくなり、得体の知れない恐怖感、人間関係の潤滑油たる、伝統的な風習をも微妙に変えてしまったのである。

公共機関や地下鉄などには、注意喚起のポスターがいたるところに貼られ、ルールにとらわれない人が結構多いメキシコであるが、この危機に対しては、当局の方針に同一歩調をとる人が多く、普段あまりマスク使用などの習慣が無い故に、戸惑いもあったのだろうが、街には青、白や多種多様な形のマスクで、頭にのせたり、のどを覆ったり、口だけ覆ったりと様々なスタイルが街に満ち溢れていた。

WHO(世界保健機関)の警戒レベルアップ宣言、滞在国の患者数の増加に対応して、ついに緊急避難として一時帰国を余儀なくされた。この処置の方針を決断するにいたるまでの、関係者の苦悩が相当あっただろうことは想像に難くない。

成田空港での機内検疫のための防護服姿の検疫官、おびたしい数の報道陣のフラッシュに迎えられた帰宅後は、感染していないと思っても、風評被害を恐れて外出することなく、家族まで巻き込んで、家の中の限られた空間で、じっと騒ぎの収まるのを待っている。

地元保健所からの健康状態チェックの問い合わせもあり、一時帰国という処置を与えていただいたことに対して、感謝しつつも、「横田さんは、帰る所があるが、私たちにはない」とぼつりと、口にした人の言葉も脳裏をかすみ、「一時帰国できて良かった」という、高揚した気分は全然湧き上がってこない。

今回のタイトルに使った、「**El peligro que no se teme, más presto viene**」(エル ペリグロ ケ ノ セ テメ マス ケ プレスト ビエネ と発音し、直訳はタイトルのようである)という諺がある。日本の諺では、備えあれば憂いなし、災害は忘れた頃にやってくるなどが思い浮かぶ。

私は30数年前、最初の海外派遣国である、グアテマラで10数万人の死傷者が出た大地震に遭遇したこ



新聞記事より(次ページの図も同じ)

とがある。その時、あと一步で自分自身に降りかかる災難となる経験をしたが、今回の新型インフルエンザの集団発生といい、長い人生経験と比較して、短期の海外生活の間に、後世に語られる歴史的出来事に遭遇する機会を得た、運命の悪戯に驚くばかりである。



インフルエンザ騒ぎの間、地震も発生し、避難する人々たち

めぐり合わせの不思議さに思うことは、これらの危難はタイトルと違って恐れていても突如発生する。しかし、今回はウイルスと言う目に見えないもののうえ、何処まで流行が拡大し、何をもちて最終到達地点なのか分からず、パニックの度合いは大きいものがあると言える。

突如「謎々」であるが、メキシコ国旗の国章とWHOの旗に、絵姿は異なるものの、共通に見かける生き物は？ じっくり見比べてみると分かるが、そう、答えは知恵を表したり、脱皮を繰り返すことから、蘇生のシンボルとも言われているヘビである。(ちなみに、

ボラッチョ・ボニート氏の干支もヘビである。本題と関係ないか・・・すみません)

たまたま今回の発生国と、健康を管理している国際機関の旗に、同一の生き物が描かれている。運命論者ではないし、特別の関連性も無いが、偶然の一致とは言えここでも運命的なものを感じている。

タイトルのように常に危難を恐れ、考えられる事前対策を講ずるのは当然として、過去からの歴史的事実から何を学び、これからどのように対処していくのか、知恵を結集し、この困難から蘇生することを祈るのみである。

「欄外編」

- WHOのヘビ:国連の旗の上にアスクレピオスの杖が描かれている(医神アスクレピオスがいつもヘビの絡んだ杖を持っていたことから)・・・医学や医療関係者のシンボル
- メキシコ国旗のヘビ:国章には、「湖の中央の岩に生えるサボテンにヘビをくわえた鷲がとまっている」が描かれている・・・図は、アステカ神話の、「そこに首都を創設せよ」という予言を示している。

